

能における『大原御幸』と建礼門院

文筆家 井上由理子

『大原御幸』はもの静かな能である。

登場人物が少なく寂しいわけではない。シテの建礼門院、ツレの後白河法皇、阿波内侍、大納言局、ワキの萬里小路中納言、ワキツレの大臣と二人の輿舁、アイの供人、合わせて九人にもおよぶ。むしろ人数としては賑やかな能なのである。

では舞台の構成や展開が単調なのだろうか。始曲時の場所は、後白河法皇の御所。大臣の名ノリより、大原への御幸について述べられ、その趣旨を供人が触れまわる。次に本舞台に据えられた大藁屋の作り物の引きまわしがおろされて、場所は寂光院の庵室へと転換。藁屋から建礼門院、阿波内侍、大納言局が現れる。やがて女院は局を伴い裏山へ向かって、中入り。後場は法皇一行の道行からはじまる。一行が女院の庵室に到着して、内侍とのやり取り。下山して来た女院が登場し、ここから舞台はやっと佳境へと入っていく。能にしては入り組んだ構成で、いささか演劇的な舞台展開となっている。

それではいったい『大原御幸』のもの静かさとは何ゆえなのか。視覚的にはシテの動きの少なさがあげられよう。なぜ動きが少ないのかは、この曲の成立過程に要因がある。

語り本系の『平家物語』は平曲(平家琵琶)として世に広められた。『平家物語』の最終の巻となるのが『灌頂卷』である。仏教用語としての灌頂とは、密教において師が弟子に法を授けるさいの一種の儀式を

さしている。平曲の世界では『灌頂卷』を秘曲として重く扱い、伝授曲と定めており、「正式に授ける」という意味合いから転じて、『灌頂卷』と名づけられたとされる。もちろん巻名は、あきらかに『灌頂卷』が仏教に帰結する内容であることも示唆している。

『灌頂卷』のうち『大原御幸』の段を典拠とするのが、能『大原御幸』である。ストーリーは『平家物語』とほぼ同じで、『大原御幸』の名文をそのまま写したり、切り継ぎするなどして巧みに戯曲化されている。平曲の秘曲『灌頂卷』は、語り芸の真髄ともいわれ、それを採る能『大原御幸』もまた、優れた詞章に加えて流麗な節付けとともに、聞きどころの多い曲となっている。また『大原御幸』は、もともと謡い物として作られた可能性が高い。現在は能一曲として上演されている『大原御幸』だが、謡い物として完成していたからか、舞事はいっさいなくて、型らしい所作もきわめて少ない。つまり『大原御幸』は動的に寡黙な能といえよう。

では謡はどうか。三番目物(露物)である『大原御幸』が、感情をあらわにするような謡い方になりえない。全体に「シットリ」と「シズカニ」、「スタリ」と淡々として謡われている。しかしながら、その内容は『平家物語』のストーリー全体を包括するほどに壮大であり、一方で、詞章の陰に微妙な人間模様をおわせる濃やかな修辭に満ちている。

たとえば、謡の深層を「花」という言葉により探ってみたい。『大原

御幸には藤や岩つつじなどの初夏の花が諷いこまれている。季節は「へ春過ぎ夏もはや、北祭の折」とあるように、北祭(賀茂祭)のころ一年中でもっとも緑のまぶしい爽やかな時候を待つての御幸だったのであろう。法皇一行の出発の謡は「へ九重の花の、名残をたづねてや」の一声ではじまる。九重とは都や宮中を意味し、「花」は女院をさす。しかも「花の名残」である。ときに女院は、三十歳前後。花の盛りとはいえないが、尼出立の真っ白い花帽子からのぞく能面の孫次郎は、成熟した女性の妖艶さを漂わせて美しい。とはいうものの、傷心を抱いて山里に隠遁する尼僧を「花」と扱うのは少し軽率とも思われ、そこに法皇の甘やかな気分が感じられないだろうか。

そもそも法皇が女院を訪ねる目的は何であったのか。まずは簡単に女院の経歴をさらってみよう。女院の出家前の名前は徳子。平清盛の娘である。十七歳のときに後白河法皇の養女として入内し、翌年に高倉天皇の中宮となる。天皇は徳子よりも五、六歳年下ということもあって、懐妊までに六年あまりを要している。若くして上皇となった天皇は、二十一歳で亡くなったのだが、清盛は崩御を見こして、徳子を法皇の側室にする計画を立てていとされる。『平家物語』の諸本によつては、大原への御幸には女院に対する法皇の愛欲があつたとするものもある。

能『大原御幸』では法皇と女院の間柄を、どのようにとらえているのだろう。法皇の御幸を知つた女院は困惑し「へ恥かしやなほ妄執の闊浮の世を、忘れもやらで浮き名を又、洩らせば洩る、逢瀬の色、袖の気色もつ、ましや」と恥じて泣く。「浮き名」や「逢瀬の色」という言葉からは、男女の関係が事実なのか、口さがない噂に過ぎなかつたのかは別にして、法皇と女院を取り巻いていた世間の眼差しが表現

されている。

戸惑う女院であつたが、すぐに法皇を「へ法のと同じ道にと頼む身の」と、自分と同じ仏門にある人だと、法皇との関係性を思い直す。「へ青葉隠れの遅桜、初花よりも珍らかに、なかなか様変る有様をあはれ」と、女院を連想させる「遅桜」に「初桜」よりも風情を感じる。法皇の配慮に、女院は感謝すらするのである。

女院の心がほどけたような雰囲気の中、法皇は突飛と思えるくらい言葉が発する。「聞くところによると、あなたは六道の有様をご覧になつたとか。仏や菩薩の位の者でなくては見えないはずなのに、不審なのです」と。法皇の御幸の第一の目的は、女院が見た六道について尋ねることであつた。六道とは仏教の世界観で、天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄をさし、衆生はこの六つの世界をめぐる、生き死にを繰り返すことである。女院は自らが経験した六道を明かしはじめた。

天上にあたるのは、まるで天人のごとく中宮となり国母となつた宮中での日々。都落ちしてからは船上の人となり、海水を飲むこともできず、渴きに身を焼く苦しみは餓鬼のようだった。またあるときは、荒磯に船が転覆しそうな恐怖に泣き叫ぶ。その声は叫喚地獄の罪人もかくやとばかりに浅ましい。陸地での戦いがあるときは、まさに目の前にくりひろげられる修羅道。馬の蹄の音を聞けば、畜生道に陥る。これらの各道のすべてを見聞きすることは、人間の苦しみの極みであつた。

居グセのていで微動だにしない女院の身体を通して、地謡が六道の様相を謡う。一曲の中心部にあたるクセの段に、六道の語りをあてているのは、ここが『大原御幸』の核心であるからだと思われる。

能『大原御幸』には謡われていないのだが、『平家物語』の諸本、あるいは巻に流布する噂では、女院の兄である宗盛・知盛と女院との間で、船中での情事があったことを畜生道にあげるものもある。また、女院は壇ノ浦の戦いで海に身を投げたものの、長々とした黒髪を熊手に絡められて、敵の船に引き上げられている。捕虜の常といわれようが、女院をはじめ平家の女性たちが、戦利品として強姦されたとしたならば、それはまさに地獄にほかならない。しかし能『大原御幸』は興味本位に取られかねない事項には触れていない。あくまで女院の品位を重んじている。『大原御幸』が『定家』『楊貴妃』とともに「三婦人」と称される由縁である。

六道を語り終えた女院に、法皇はさらに「安徳天皇の最期のご様子を物語ってください」と請う。

安徳天皇の入水を語る前に、女院は三人の武人の名前をあげた。裏切りが横行する戦場にあつて、源氏に寝返つた豊後国の緒方三郎を名指ししたのは、女院の消すことが出来ない、怨恨の根なのであろう。憎い者と出会う怨憎会苦を示す一方、教経と知盛の勇敢な死にさまざま語り、愛する者と別れる苦しみの愛別離苦を嘆く。人間道における女院の苦しみを表わしつつ、能は具体例をあげることで、源平合戦の記憶を舞台に喚起しようとしている。

女院の語る安徳天皇の最期は『平家物語』巻十一の「先帝身投」の美しすぎるほどに悲しい名文によつて綴られる。

それにしても、女院に安徳天皇の入水の様子を思い出させ、自らの口から語らせるのは、あまりにも残酷ではないか。わが子に先立たれるほどの悲しみは、この世に二つとない。さらに女院には国母という社会的な立場があつた。目の前で天皇を死なせてしまったのである。

一人の母としてだけではなく、国の頂を守れなかった国母としての失態。哀れな重責を背負つて入水した女院であつたが、わが子である天皇の後を追うことはできなかった。

潔く死ねなかつたことも含めて、女院は自主性の乏しい人間として評価されるむきがある。確かに法皇と清盛という絶対権力者の政略のために生かされた人生でもあつた。しかし「灌頂巻」と能『大原御幸』は、女院を主体として平家一門の一部始終を語らせている。語らせ役はほかならぬ法皇である。

法皇とは、女院にとつてどんな存在だったのか。言うまでもなく平家追討の院宣を下した張本人だ。都落ちのさい、法皇は平家を見限つて姿を消し、まだ安徳天皇が在位しているにもかかわらず、後鳥羽天皇を即位させた。安徳天皇を無視し、平家一門を徹底的に滅亡させたのだ。女院が法皇に憎しみを抱かないわけがない。しかし能『大原御幸』は女院に法皇への恨み言を語らせはしなかつた。

安徳天皇の最期を涙ながらに話し終えた女院に、法皇は何も語りかけず、還幸していく。去り行く法皇を、無言で見送る女院の姿『大原御幸』の静寂なる終曲である。

能が、女院に恨み言を口にさせなかつたのはなぜか。能が、法皇に慰めの言葉一つもかけさせなかつたのはなぜか。それは、恨みや慰みによつて女院自身も、平家一門をはじめ戦で落命した幾多の人々も、けつて救われはしないからではないか。いまもなお妄執にとらわれる女院は、気づいていたのだ。「生きながら六道の苦しみを味わつたわが身。六道の輪廻から離れて極楽に往生したい。ただひたすらに阿弥陀仏の名を念じるしか、もはや救いはない」。

御幸のあつた憂き世から、女院は庵室の内へともどつていく。